過去問題

令和8年度日本大学文理学部中国語中国文化学科　総合型選抜（1／3）

試験科目	受験番号	氏名	採点
論述試験			

【試験時間　６０分】

以下は、中国と日本の家（家族）の在り方について説明しています。文章を読み、次の問一～問五に答えなさい。

(前略)

革命前の中国（農村）社会の特徴について、多くの論者が「家族主義」の存在について指摘している。「家族主義」は、農村家族において、よりわかりやすい形で現れる。

たとえば社会学者で『南支那の村落生活』の著者、D・H・カルプは「家族は審判の基礎であり、判断の a)ヒョウシキである」と述べる。また、東洋史学者の旗田巍は、「家族主義は中国社会の全般に機能する原理であり、それを除外しては中国社会は成立しない（中略）その家族主義は強さと同時に狭さをもち、社会集団に孤立的性格をもたせるとしている。

注意すべきは、旗田が「強さと同時に狭さを」もつと述べているように、中国の「家」の構造やニュアンスは、日本とは異なっていることである。もしも現代的な都市中産階級の核家族のイメージで捉えてしまうと、日中の家族のあり方は b)大差のないものと映るかもしれない。しかし、たとえば戦前の日本農村と、革命前の中国農村の家族を想像力を c)膨らませつつ比較してみると、差異は明白である。

日本の伝統的な家族では、家というのは団体であり、喩えるなら「竹」のようなものである。竹の内部にいる者が、家族のメンバーシップをもつことになる。節による区切りは世代と考えればよい。社会学者、有賀喜左衛門の岩手県の大家族の研究に示されたとおり、そこでは血縁関係にない奉公人までも、「斎藤家」という竹の内部に住んでいれば、家族のメンバーとみなされる。つまり、一本の竹の内部空間という「場」を共有していれば、それが家族なのである。家々は一つの「場」を形成するので、村のなかでの d)ヤシキの空間的な位置は先祖代々、固定されていて、そう簡単には移動しない。

中国の家の、日本のイエとの最大の違いは、先祖から子孫に向かう「血の流れ」を第一にみることである。つまり、同じ血が流れていない者は家族のメンバーにはなれない。中国の「家」は、枝分かれしつつ地下に向かってどんどん伸びていく樹木の「根」に喩えられる。そこには日本のような、「家」という団体が存在しておらず、家族にとって大事なのは毛根のような血の流れ、父系血縁でつながっていることである。個人というものは、次々に枝分かれする樹根のどの位置にいるかによって他の家族成員との関係性が決まってくる（図１－１）。

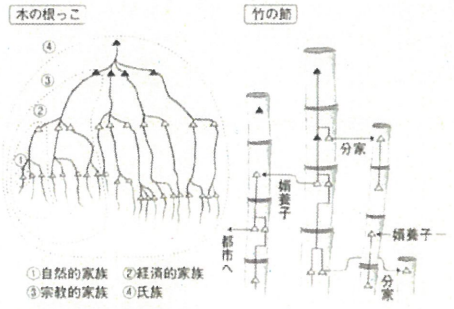


図1-1　日中家族構造の比較
注：簡略化のため、男性成員のみ示した。○は存命者、▲は死者を指す
出所）筆者作成

この点は、結婚後の女性の位置にも現れる。e)シュウチのように、日本では嫁いできた女性はイエという「竹の節」のなかに入るとともに姓が変わる。これにたいし中国の女性は、嫁いできたからといって実家の先祖に連なる「血の流れ」が変わるわけではないので、姓も変わらない。姓は嫁ぎ先という「場」ではなく、あくまで自らのオリジンである血の流れを表している。

19 世紀末に宣教師として山東省西北部の村に滞在したA・H・スミスは、すべての中国人の妻は、「或る他の家族から自ら好んで来たのではない。突然に、f)有無をいわさず彼女の夫の家族樹の上に野生の枝として接木されたものである」と述べている。ここでいう家族樹は「根っこ」をひっくり返したものと考えればよい。「野生の枝として接木」されるとは、子供、特に男子をもうけ、血の流れを g)ソソイでいくためだけに必要とされる農村女性の立場を示している。女性は、男児の母親となり、血の流れの継承に貢献することで、初めて家庭内での地位を獲得する。

伝統的な家産相続のあり方も顕著に異なっている。長子相続が主流であった日本では、「分家」という言葉は動詞としても名詞としても使われる。名詞の場合、「あの家は我が家の分家だ」のように「本家」から別れ出たものが「分家」である。ところが諸子均分相続の中国では「分家」という言葉は、動詞としてしか使えない。法制史学者の仁井田陞が述べているとおり、「中国の家族分裂は本家から分家を分出するものではなくて、均等に分かれる意味での細胞分裂であり、等位の家が分立する関係に置かれる」のである。

つまり、日本の場合、分家することの方が特別であり、分家にたいする本家の h)オンケイでもある。「分家を出してやる」「分家させてもらった」というように、本家の分家にたいする優位というのは変わらない。与えられる財産も本家の財産のごく一部である。だから新しく創設された竹は、そこから別れ出た古い竹よりも細く、短いのが基本である。

これにたいし、中国の分家行為は、兄弟間の i)徹底的な平等の関係が出発点になっている。親世代の財産は、兄弟の間で公平に分割される。こうして血の流れに沿って、細胞分裂が起こり、根っこのような構造が形成される。

血の流れ、すなわち「根っこの分かれ目」をどこまで遡るかで、「家族」の範囲も伸縮自在に変わってくる。これを、①自然的家族（夫婦と子供）、②経済的家族（同居同財）、③宗教的家族（現実の共同祭祀の範囲）、④氏族（始祖まで遡った祭祀圏）の同心円の構造として理解することができる。

このように、家の範囲が「伸縮自在」であることの根本的な理由は、中国の社会のあり方が、自分を中心として徐々に外縁に広がっていくような社会関係で構成されているためだろう。特に漢人の作り出す家族そして社会というものは、社会学者・人類学者である費孝通の有名な説明にあるとおり、集団的ではなく自己中心的（ego-centric）な構造をもっている。「エゴ・セントリック」とは別に悪い意味でなく、自己がまず起点としてあり、父母、兄弟など近親者が一番近くに、次に親しい者がその外に、というように j)親疎に応じ徐々に、波紋状に外に広がっていくような社会の捉え方のことである。異なる個人はそれぞれ異なる「起点」をもつので、集団の境界は常に相対的で、安定しない。このような中国の「郷土社会」に対置される西洋そして日本の伝統社会では、個人や「イエ」がさまざまな契約に基づき集まって形成される「団体」の存在が構造の中心となる。（後略）

田原史起『中国農村の現在―「14億分の10億」のリアル』（中公新書、2024）より（一部改変）

過去問題

令和8年度日本大学文理学部中国語中国文化学科　総合型選抜（2／3）

試験科目	受験番号	氏名	採点
論述試験			

問一　波線部 a)～j)について、カタカナは漢字になおし、漢字はその読みをひらがなで書きなさい。なお送り仮名が必要な場合は送り仮名も書きなさい。

a)＿＿＿＿＿＿　b)＿＿＿＿＿＿　c)＿＿＿＿＿＿　d)＿＿＿＿＿＿　e)＿＿＿＿＿＿

f)＿＿＿＿＿＿　g)＿＿＿＿＿＿　h)＿＿＿＿＿＿　i)＿＿＿＿＿＿　j)＿＿＿＿＿＿

問二　筆者は、中国と日本の家族の在り方について説明し、中国社会および日本の伝統社会の構造の中心となっているものをそれぞれ漢字二字で表している。中国と日本の社会の中心となっているものについて、本文中の言葉を用いて書き抜きなさい。

中国 □□　　日本 □□

問三　筆者は日本と中国の家（家族）をそれぞれ何に喩えているのか。次の文に適切な本文中の言葉を挿入し説明しなさい。

筆者は、日本の家を［ A ］に喩え、中国の家を［ B ］に喩えている。

A（　　）　　B（　　）

問四　問三の解答を踏まえて、日本と中国の家（家族）のそれぞれの特徴について150字以内で説明しなさい。

過去問題

令和8年度日本大学文理学部中国語中国文化学科　総合型選抜(3／3)

試験科目	受験番号	氏名	採点
論述試験			

問五　本文は、日中間の差異について比較分析している。私たちの身近にも、地域間、世代間、ジェンダー間など様々な差異がある。こうした差異について、具体的な例を挙げて、あなたの考えを交えながら 400 字以内で自由に論じなさい。

